

第一弾「卒業研究と本とわたし」に続き、今回はその第二弾「書評と本とわたし」というテーマでお届けする。本稿は、教員と経済学部4年次の坪島阿紀さんとの〈コラボ作品〉となっている。坪島さんは「週刊読書人」で全国の大学生が寄稿する「書評キャンパス」の本学経済学部・初の執筆者。塚本、坪島の順で以下、執筆していく。

[特別寄稿]

書評と本と

経済学部
塚本 恭章 × 坪島 阿紀



わたし

私(坪島)が書評を書くきっかけは、2年次の塚本先生の秋学期「基礎演習」でした。先生からの「書評を書いてみない?」という何気ない声かけ。「書評?」というのが当時の私の心境でしたが、何事にも挑戦する持ち前の性格のため、書こうと決めました。いろんなことが見えました。

I. 〈書評歴〉の回想、そして威力

わたし自身がいわゆる書評専門の一般紙に文章を寄稿するようになったのは、2008年末以降のことだ。最初の書評本は、世界的経済学者の(故)青木昌彦スタンフォード大学名誉教授の『人生越境ゲーム—私の履歴書』(日本経済新聞出版社)だった。「アクティオ・ネットワーク」という、その名を知らない媒体に西部忠先生(専修大教授・進化経済学会会長)の紹介で掲載していただいた。3200字というやや長めの分量だったが、その紙面は一文も修正することなく、わたしの書評を高く評価し掲載してくれた。大袈裟に言えば、一般紙へのわたしのデビュー作である。

現在も執筆機会のある「週刊読書人」。本紙面への初回掲載は2009年6月26日号、松原隆一郎氏(当時東大教授)の『経済学の名著30』(ちくま新書)。2008年3月に博士学位を取得したばかりで、書評経験のほとんどない人間の文章掲載はある種の英断だったろう。字数は1600字。この分量で松原氏の本のもつ特徴と魅力を描き切らねばならない。幸いにも完成稿を松原氏自身も高く評価して下さった。当該文章を書いている現在のわたしの最新書評は「週刊読書人」の2019年10月18日号だから、まさに10年だ。

*

上記でわたしの「書評歴」を回想したのは、むしろそのことを「懐かしむ」ためではない。書評という作業を、とくに一般紙で10年「継続」してきたことの「威力」をあらためて語り直すためだ。そのことをきわめて強く体感できたのは、『現代思想 第46巻第6号』(2018年4月)と『情況 第5期2巻第3号』(2019年7月)の各誌への「特集」を依頼されたことに関わる。

前者は4月号「ブックガイド」として刊行されたものだ。昨今の現代世界をめぐる、とくに政治経済的・思想的な〈問題状況〉を構造的に論説し、それを読み解く「経済学」の必読文献を紹介・論評してほしいというのが依頼テーマだった。原稿締めまでわずか三週間。最初はそんな短期間で書けるはずないと丁重にお断りした。

そもそもテーマがきわめて重厚で、そのためのブックガイド執筆には大きな責任が伴う。「引き受けたが書けなかった」では、「経済学」分野だけ穴があく。ただ『現代思想』編集者は、熱い励ましでわたしを説得した。最終的に16000字程度の文章を書き上げたが、それが可能だったのは、10年以上も専門書・一般書・入門書・新書を読み続け、書評を「書き続けていた」からにほかならない。「思考・思索」のストック以上に、「書評(文章)」のストックはこのときかなり有効に活用できた。なぜなら、ここ10年の世界史的な政治・経済・思想の問題状況がある程度自分なりに掴んでいることに気付いたからである。大きな発見だった。ただ「読んでいた」だけでなく「書いていた」こと、それによって情報や知識がしっかりピン止めされ、まとまりのある良質のサーベイ論文が書けたわけである。

後者の『情況』誌では、「今読んでおきたい経済・経済学の本」というテーマで最終的に55冊を取り上げる、かなり大きな特集となった。これも『現代思想』同様に、書評などを継続的に書いていたこと、そして現在進行形で数冊の書評を常に仕事として遂行していることが決定的に重要だった。「週刊読書人」の明石編集長は「これ自体がある種の経済学史ですね」との嬉しいコメントを寄せてくれた。(なお「週刊読書人」から100冊論評した単著を刊行予定)

II. 〈書評論〉と学生へのメッセージ

書評の「書き方」についてもいろいろ研究した。多くの書評を読み、どういいう書評がよいか、またどんな意図をもって書評しているか、その深層心理にも着眼してみた。青木昌彦、伊藤誠、岩井克人、塩沢由典、八木紀一郎、猪木武徳、根井雅弘、西部忠氏ら書評家としても一流といってよい人たちの文章から学んだことは数多い。書くことの難しさと重要さを知ったのも実に貴重な経験だった。出版社や担当編集者は書評掲載に常に注目している。刊行される本の数からすれば、書評されない本のほうがはるかに多い。書評でもっとも難しいのは「書く」ことではない、「選書」そのものである。この観点からすれば、書評されない本のほうがはるかに多い。書評でもっとも難しいのは「書く」ことではない、「選書」そのものである。この観点からすれば、書評されない本のほうがはるかに多い。書評でもっとも難しいのは「書く」ことではない、「選書」そのものである。この観点からすれば、書評されない本のほうがはるかに多い。

近年、学生諸君が「本を読む」営みから迂遠になり、日常生活へのスマホの浸透から情報検索を容易におこなえる反面、その「先にある」ものへの渴望が薄れているように感じられてならない。卒業研究テーマも未来志向型のもが多く、極端なことを言えば、卒業してすぐに陳腐化してしまうようなものも多い。かりにも「研究」成果といえるならば、ある程度の期間は持ち堪えうるような歯応えのあるものが望ましい。時間と労力をかけることが欠かせないのだ。本を評する作業は、血となり骨となる。「書評」は評者が「本」と「読者」を繋ぐ媒体であり、最良のコミュニケーション能力涵養の方法のひとつではないか。わたしのゼミでは今年初めて、論読文献『14歳からの資本主義』(大和書房)についての「書評大会(800字・2000字ヴァージョン)」を実施した。次年度も継続したい。

I. リアへの〈ストーリー〉を活かす

いつ頃のリアクションペーパーだったか、正確な記憶はないのですが、たしか「今年の一文字」というお題が出されたときのことだったと思います。翌週の「基礎演習」時に提出する私の毎回のリアペは、かなり多めの分量を書いていた。ほとんど毎回、裏面までびっしり書いたのです。そう、ほんとにびっしり!“長さ”とそのなかにあるストーリーは“私らしさ”を映し出し、塚本先生はそれを常に感じ取ってくださっているようでした。

その年の「回顧」リアペ。私は夏季休暇に挑戦したいことのほとんどをや切り切り、それなりの達成感があったのですが、冷静に振り返って見たとき、ある種の自己満足に終始していたとリアペに書きました。「自分のゴールがしっかり見えていない」とも書いた記憶があります。より正確に言えば、「何を実現し、人間的にどう成長できたのか?」と端的に聞かれると、返答に窮するような状態でした。「何か足りないな」と思っていたわけです。塚本先生はそういう私の心理状況をリアペから察知され、「だったら書評に挑戦してはどう?」と誘ってくれたのです。



恐る恐るもいざ登る志

実際に書き終えて、書評専門紙の「週刊読書人」に自分の文章(書評)が「活字」になって初めて分かったことがあります。それは「書」と真摯に向き合い、それをつうじて「読み手」を明確に意

識して文章を「書く」という行為は、自分がかつて経験したことのないとても深い「思考」と「思索」の旅に誘ってくれたことでした。何度も何度も書いては細かく「修正」を施し、より良いものに近づけ、そして最終的に「完成」させる。時間を経て、「もっといい書評が書けたのに!」と振り返ることができても、多くの制約のなかその時点でベストのものを仕上げた感慨は、学生生活で味わったことがないものでした。講義を聞いたり、試験・資格試験の勉強にはないものがそこにはあったのです。著者の創作精神を自分なりに掴み取り、「読み手」との架け橋となる。大袈裟に言えば、〈世界〉の拡がりです。



心地よい海風を感じて

II. 川村元気「億男」の書評に挑む

塚本先生の左記の文章にもあるように、どんな本を「選書」するか、これは実際に書評することより難しい課題かもしれません。本屋にいてもネット検索しても、それこそ無数の本が存在しています。迷うのは当然です。しばらく悩んだあげく、私は人生初の書評対象本を、川村元気氏の『億男』(文春文庫)に決めました。私は“お金持ちになりたい”という思いで経済学部に入学したため、この本を読めば何か“お金”のヒントが得られるかもしれないと、タイトルに期待が膨んだからです。興味関心をもてる本を選書する、

やっぱりこれが選書の基本です。限られた1300字程度の分量で「原稿」を書くなかで意外に難しかったのが、〈文章の締め〉でした。うまく締まらない! 今まで読んだ冊数のせいでもあるのですが、言葉がなかなか出てきません。塚本先生にもアドバイスをいただき、最後は納得のいく文章に仕上げられました。完成稿を小口副編集長に添削していただいたところ、「真っ赤」で返ってくるかと思いきや、ほとんど訂正なく採用していただきました。2カ月間に及ぶ成果が立派な「活字」になり、「週刊読書人」に掲載されたのを見た時の感動ははっきりと覚えています(2018年8月3日号掲載。その後、8月7日に塚本先生にメール送信!)

書評はマラソンに似ています(今年は12月にホノルルマラソン、来年3月にウィメンズマラソンに挑戦します!)。ゴールをめざすまでのなかで読解力や理解力、そして忍耐力など多くの力が培われます。それを身をもって体験できたことは、間違いなく大きな収穫だったと断言できます。これから多くの本を読み続け、〈塵も積もれば山となる〉をめざしたいです。そこには、きっと新たな「自分探し」があるでしょう。6月に就職活動を終え、今年も書評を書くこと決めました。1冊がおのずと2冊目へと私を誘ってくれたのです。

(書籍版『書評キャンパス at 読書人2018』(読書人)をみたら、川村元気氏から私の書評へのコメントが!とても貴重な宝物です)



華やかさ、自然と融和